

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02216

研究課題名（和文）心身相関とマントラをめぐるインド密教史 『アビダーノータラ』原典研究

研究課題名（英文）Development of Psychosomatic Theories and Mantra Theories in Indian Esoteric Buddhism: A Philological Study of Sanskrit Manuscripts of the Abhidh&#257;nottaratantra

研究代表者

杉木 恒彦 (Sugiki, Tsunehiko)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：40422349

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：主要なインド密教経典の1つである『アビダーノータラ・タントラ』（10世紀頃編纂）の第14、37、50、51、52、57、58、59章、ならびに密接な関連文献である『成就法の大海』（10世紀頃編纂）第8章の梵語校訂テキストと英語訳注と、それらの章の内容 心身相関論とマントラ論 を分析する思想研究論文を完成させた。それらにより、もともとは外的で主として黒呪術的であった同伝統のマントラが、徐々に曼荼羅の観想（瞑想）の形等をとって内面化されていったこと等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界初となる『アビダーノータラ・タントラ』第37、50、51、52、58章と『成就法の大海』第8章の梵語校訂テキストと英語訳注を作成した。『アビダーノータラ・タントラ』第14、57章には先行する基礎研究があるが、それらに代わるより精緻な梵語校訂テキストと英語訳注を完成した。これらの文献の梵語一次資料を関連学会の他の研究者の方々に、英訳資料を他の研究者と一般の人々に提供できたことには、学術的・社会的意義が認められよう。同時に、それらの文献の思想内容（マントラ論と心身相関論）について初めて紹介したり、新たな事実・解釈を指摘したことは、インド思想史研究に対する一定の貢献になっていると考えている。

研究成果の概要（英文）：In this project I have completed creating a critical Sanskrit edition and annotated English translation of the Abhidhaanottaratantra (a major Buddhist tantra composed around the 10th century), chapters 14, 37, 50, 51, 52, 57, 58, and 59, and the Saadhananidhi, chapter 8 (which is closely related to some of those chapters in the Abhidhaanottaratantra). I have also developed papers that deal with the contents of those texts: theories of mind-body connection and mantras. Through the study I have also clarified the following: Originally the mantras in this scriptural tradition were practiced in external rituals mainly for the purpose of harming others (black magic); and those mantras gradually came to be performed in the form of internal practices such as a meditation on mandalas that represent those mantras.

研究分野：南アジア密教研究

キーワード：アビダーノータラ タントラ 密教 サーダナニディ 心身相関 マントラ 仏教学

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の主題材は、10世紀頃編纂のインド後期密教経典『アビダーノータラ・タントラ』(Abhidhānottaratantra: 以下、『アビダーノータラ』)である。『アビダーノータラ』のサンスクリット語(以下、梵語)写本は多数現存し、ネパールで書写された27本の写本の現存を確認できる。また、仏教内外の様々な文献と多くの偈頌を共有しており、その受容と展開の幅広さがうかがわれる。インド・ネパール密教を研究するうえで欠かせない資料である。だが、梵語写本を用いた『アビダーノータラ』の基礎的研究は少ない。Martin Michael Kalff 博士による第9、14、19、24、39、40、41、42章の校訂テキスト(コロンビア大学への博士学位請求論文: 1979年)と、Alexis Sanderson 教授によるシヴァ教文献群との関連に関する論考(The Śaiva Age—The Rise and Dominance of Śaivism during the Early Medieval Period, *Genesis and Development of Tantrism*, 2009年, pp. 156-243、等)という重要な成果はあるものの、十分な研究が行われているとは言い難い。

仏教内外のタントラの研究者の間で、『アビダーノータラ』の重要性への関心は高まっている。合計7人による国際的な研究プロジェクトである“『アビダーノータラ』校訂プロジェクト”がチューリッヒ大学のOlga Serbaeva 博士を中心に2016年2月に始動し、私(以下、「研究代表者」)はその一員(唯一の日本人)となった。だがこのプロジェクトは組織としての継続的な研究費を得ておらず、当面、参加者は各自で保有する研究費を使用して関連研究を進めていくことになっている。こうした背景があって、研究代表者による本研究が開始された。

2. 研究の目的

本研究は、『アビダーノータラ』の第14、37、50、51、52、57、58、59章の梵語校訂テキストと英語訳注と、それらの章の内容——心身相関論とマントラ論——を分析する思想研究論文を完成させ、公開性ある学術媒体を通して国内外に提供すること目的とする。それら7つの章は他の様々な文献(特に密教文献)と共通の偈頌を多く含んでいるので、それらの梵語校訂テキストは、他文献の解読にも有益な資料となる。なお、それらの章のうち、第37、50、51、52、58、59章の梵語校訂テキストと英語訳注の刊行は世界初になる。さらに、それらの章が扱う心身相関論とマントラ論は、思想史上、同トピックの重要な展開を示す内容となっており、南アジア密教史の解明のうえで有意義な題材である。

また、『アビダーノータラ』の第37、51、52、59章は、カンバラ(Kambala)作『サーダナニディ(Sādhānanidhi)』(「成就法の大海」、10世紀頃編纂)の第8章と密接な関連がある。その梵語校訂テキストと英語訳注の作成ならびに内容分析も行う。

3. 研究の方法

現存が確認できている『アビダーノータラ』の梵語写本27本のうち、校訂に適すると判断できる5本(デジタル複写)を選び、用いる。それらは、①12世紀の貝葉写本(The Institute for the Advanced Study of World Religions[以下、IASWR no. I-100=Nepal-German Manuscript Preservation Project [以下、NGMPP] no. E1517/7)、②18世紀の紙写本(NGMPP B113/4)、③13世紀の紙写本(Asiatic Society Kolkata no. G10759)、④17世紀の紙写本(NGMPP E695/3とE696/1)、⑤書写年代不明の紙写本(東京大学図書館 no. 12)である。これらのうち、現存する最古の写本である①を校訂の底本に用いる。これら5本の写本は、①②、③④、⑤という系譜に区分できる。③④は①②とは異なる読みを比較的多く含む。⑤は①②と③④の双方の読みを含む。

『サーダナニディ』の梵語写本は4本現存しているが、そのうち貝葉写本3本を用いる。すなわち、①NGMPP B31/20、②Goettingen 大学図書館 Xc 14/51、③NGMPP E2990/15である。いずれの写本も書写年代は記されていないが、最古と考えられる①を校訂の底本とする。③は断片であり、校訂対象となる第8章の一部に対して使用できる。

主要な関連文献として、『サンブタ・タントラ』(Samputatantra) 第6章、『ヴァジュラダーカ・タントラ』(Vajradākatantra) 第11、15章、『ダーカールナヴァ・タントラ』(Dākārnavatantra) 第5章、『マハームドラーティラカ・タントラ』(Mahāmudrātilakatantra) 第4、8章、それらの注釈書群、ならびに『成就法の宝蔵』(Sādhānanidhi) 第8章と『成就法の花輪』(Sādhānamālā) no. 250と『定説集成』(Sthitisamāsa) 後半部(マントラの道の章)がある。その他、『タントラサドバーヴァ』(Tantrasadbhāva) 等、遠因関係にある仏教外(バラモン教やシヴァ教)の関連文献も使用する。

以上に述べた『アビダーノータラ』と『サーダナニディ』の梵語写本と上述関連文献群に登場する共通・類似の偈頌を逐一確認しながら、文脈の相違も考慮しつつ、『アビダーノータラ』と『サーダナニディ』の文章1つ1つを丁寧に校訂し英語訳注を施していく。この過程で、連携する上述海外の研究者の方々に校訂テキストや英語訳注を見てもらい、意見をもらう。こうした校訂作業を前提に、内容の精緻な思想分析を行う。思想分析は、上述関連文献群を用いながら、仏教内外の思想史の流れをふまえたものにする。

4. 研究成果

本研究の重要な成果の1つは上述の諸文献の梵語校訂テキストと英語訳注を完成し（日本を含む）国際学会と国際社会に提供することである。梵語校訂テキストは研究者の方々がそれらの文献の一次資料として各自の研究に使用できるものであり、訳注は研究者と一般の方々がそれらの文献の内容を知る手助けになるものである。本研究が提供する『アビダーノッタラ・タントラ』第37、50、51、52、58章と『成就法の大海』第8章の梵語校訂テキストと英語訳注は世界初である。『アビダーノッタラ・タントラ』第14、57章には先行する基礎研究があるが、問題が多い。本研究でそれらに代わる、より精緻な梵語校訂テキストと英語訳注を完成した。

これら校訂テキストと訳注をここで再現することは、すでにそれらをオープンアクセスの学術誌に刊行していることからあまり意味がないし、そもそも分量の問題から不可能である。それゆえ、以下では、それら以外の成果、すなわち、主要文献の編纂年代の前後関係の解明と、タントラ論と心身相関論の思想的展開の解明に焦点を絞って記述していく。なお、本研究の主要な要素であるマントラの名称には下線を付す。

まず、『アビダーノッタラ』の梵語写本（前述）について、研究代表者は写本②の意義に関する根本的な指摘を行った。以下の通りである。すでに知られているように、写本①は現存する『アビダーノッタラ』の写本のうち最古のものである。だが合計194フォリオのうち6フォリオが失われている。このことは『アビダーノッタラ』の校訂作業が従来の研究においてあまり進められてこなかった一因になっている。だが研究代表者は、これまで注目されなかった写本②が、書写年代こそ新しく誤写も含まれるが、それら6フォリオが失われる以前に①を直接書写したもの（あるいは間接的であってもとても近い位置にあるもの）であることに気付いた。写本②を合わせて用いれば、写本①を底本とした『アビダーノッタラ』の校訂作業が可能になる。

『アビダーノッタラ』や『サーダナニディ』が属する仏教タントラの聖典伝統をサンヴァラ（*saṃvara*）と言う。この聖典伝統では一般に最高の尊格はヘルカ（*Heruka*）とその妻ヴァーラーヒー（*Vārāhī*）あるいはヴァジュラヴァーラーヒー（*Vajravārāhī*）である。サンヴァラの諸文献には広く以下のマントラが説かれる。

甲冑としての6人のヨーギニー（*yoginī*）のマントラ。身を護る働きあることから甲冑のマントラと呼ばれる。6人のヨーギニーは（1）*Vārāhī*、（2）*Yāminī*、（3）*Mohanī*、（4）*Samcālānī*、（5）*Samtrāsānī*、（6）*Caṇḍikā*である。これら6人はナーガールジュナ（*Nāgārjuna*）作『ダルマサングラハ』（*Dharmasaṃgraha* : 13）にも登場する。彼女たち6人のマントラはそれぞれ、（1）*om vaṃ*、（2）*hām yoṃ*、（3）*hrīm moṃ*、（4）*hreṃ hrīm*、（5）*hūṃ hūṃ*、（6）*phaṭ phaṭ*である。

ヘルカのウパフリダヤマントラ（*upahrdayamantra*）。「ウパフリダヤ」は「心臓・本質に準じるもの」という意味である。ヘルカのウパフリダヤマントラは *om hrīḥ ha ha hūṃ hūṃ phaṭ* である。合計7文字なので、7文字のマントラとも呼ばれる。

ヘルカのフリダヤマントラ（*hrdayamantra*）。「フリダヤ」は「心臓」「本質」という意味である。ヘルカのフリダヤマントラは *om śrīvajra-he-he-ru-ru-kaṃ hūṃ hūṃ phaṭ dākinījālasaṃvaram svāhā* である。合計22文字なので、22文字のマントラとも呼ばれる。

ヴァーラーヒーのフリダヤマントラ。それは *om vajravairocaṇīye hūṃ hūṃ phaṭ svāhā* である。合計13文字なので、13文字のマントラとも呼ばれる。

9世紀頃編纂の、サンヴァラ最古の経典『チャクラサンヴァラ・タントラ』（*Cakrasaṃvaratantra*）では、これらのマントラの実践方法は何らかの儀礼において念誦する（唱える）ことであり、その効果も多くは対象者に危害を加える黒呪術的なもの（他文献だが仏教タントラに内在的な言葉を使えば「残忍な儀礼」*krūrakarma*）であった。だが10世紀頃に編纂の『サーダナニディ』第8章を経て、同じく10世紀頃編纂の『アビダーノッタラ』第37、51、52、59章に至ると、様相が変わって来る。それら外的で黒呪術的であったマントラが、尊格の姿をとって曼荼羅を形成し、念誦に加えて曼荼羅の観想（瞑想）というより内面的な形で実践されるようになっていった。また、その実践の効果も、黒呪術的な効果を否定はしないがそれに限定されず、より幅広く、輪廻からの解放といった出世間的な効果ももたらすとされるようになった。実践の内面化と効果範囲の拡大には相関関係があるのだろう。なお、マントラが曼荼羅の形体を取るとは、実践者が観想の中で、それぞれのマントラを構成する各文字からそれぞれ尊格を生起させるということである。こうして、1つ（あるいは1組）のマントラにつき1つの曼荼羅が出来上がる。さらに、これら曼荼羅の尊格たちには、それぞれの清らかさ（*viśuddhi* 等）として、仏教に伝統的な教義概念が宛がわれる。それら曼荼羅の観想は単に尊格の姿を思うだけではなく、それらが自らの清らかさとしてもつ教義概念の思念へと実践者を導く。以下、『アビダーノッタラ』が説く内容を概観する。

『アビダーノッタラ』第37章は、甲冑としての6人のヨーギニーのマントラの曼荼羅を以下のように説く。五花弁の蓮華の中央に（1）*Vārāhī*（*vaṃ* 字）が、五花弁に（2）*Yāminī*（*yoṃ* 字）、（3）*Mohanī*（*moṃ* 字）、（4）*Samcālānī*（*hrīm* 字）、（5）*Samtrāsānī*（*hūṃ* 字）、（6）*Caṇḍikā*（*phaṭ* 字）がいる。彼女たちにはそれぞれ（1）*Vajrasattva*、*Vairocana*、*Padmanartesvara*、*Heruka*、*Vajrasūrya*、and *Paramāśva* という夫がいる。彼女たちを単独で、あるいは夫と交合した姿で観想してもよい。この曼荼羅の実践の効果は、転輪王になること、ヨーガと超能力に自在になること、

有情を輪廻から救うこと、持金剛になること、である。

また、『アビダーノータラ』第 37 章は、この曼荼羅を拡大した Mañjuvajra (もとは秘密集会系の尊格) の曼荼羅も以下のように説く。中央に (1) Mañjuvajra とその妻 (名称不明) が、その周囲に (2) ~ (7) 上述の甲冑の 6 人のヨーギニーたちが各自の夫たちとともに位置する。さらにそれを囲む輪がある。その輪の四方の位置に 4 つの門があり、それぞれ (8) Kākāsyā、(9) Ulūkāsyā、(10) Śvānāsyā、(11) Sūkarāsyā がいる。門と門の間 (四隅) には (12) Yamadādhī、(13) Yamadūti、(14) Yamadamṣṭrīnī、(15) Yamamathanī がいる。これら (1) ~ (15) の尊格たちの清らかさは以下の通り。(1) は極清浄法界、(2) ~ (7) は十波羅蜜と十地の最初の 6 つ、(8) ~ (11) はそれらの残りの 4 つ、(12) ~ (15) は四諦である。そして、この曼荼羅の効果は全ての儀礼の成就である。

『アビダーノータラ』第 51 章は、ヘールカのウパフリダヤマントラすなわち 7 文字のマントラの曼荼羅を説く。すなわち、中央に (1) Vajradāka 別名 Heruka と妻 Vārāhī (hūṃ 字) が、その周囲に (2) Herukī 別名 Herukavajrā (phaṭ 字)、(3) Vajrabhairavī (hūṃ 字)、(4) Ghoracaṇḍī (ha 字)、(5) Vajrabhāskari (ha 字)、(6) Vajraraudrī (hrīḥ 字)、(7) Vajradākinī (om 字) という女尊たちがいる。これら (1) ~ (7) の尊格の清らかさは七覚支である。この曼荼羅の実践の効果は、福德の少ない者でも半月で、毎日実践すれば 7 日で成就を得ることである。ヴァイシャカ月の満月の日に生身の女性との性ヨーガをとまなうこの曼荼羅の実践を行えば、ヘールカと同等になれる。

『アビダーノータラ』第 52 章は、ヘールカのフリダヤマントラすなわち 22 文字のマントラの曼荼羅を説く。八花弁蓮華の中央に (1) Heruka 別名 Herukavajra (hūṃ 字) と (2) Vārāhī (śrī 字) が、八花弁に (3) Praṇavadākinī (om 字)、(4) Vaḍavāmukhadākinī 別名 Vaḍavāmukhī (va 字)、(5) Jraśogrā (jra 字)、(6) Hemābhā 別名 Hemābhādākinī (he 字)、加えて菩提の乳を入れた 4 つの罽毘杯が配置されている。以上の輪の外を、(7) Helikā (he 字)、(8) Rucakī (ru 字)、(9) Rucakamālinī (ru 字)、(10) Kaṅkālīnī (kaṃ 字)、(11) Hūmkāriṇī 別名 Hūmkārī (hūṃ 字)、(12) Phaṭkāriṇī (phaṭ 字)、(13) Dāmārī (dā 字)、(14) Kilikilā (ki 字) が囲む。さらにそれを囲む輪がある。その輪の四方の位置に 4 つの門があり、それぞれ (15) Nīlodbhavā (nī 字)、(16) Jālottamā (jā 字)、(17) Lambodarī (la 字)、(18) Śambarī (śaṃ あるいは saṃ 字) がいる。四隅には (19) Varālogrā (va 字)、(20) Ramakogrā (raṃ 字)、(21) Svābhajālottamā (svā 字)、(22) Hāravijayottamā (hā 字) がいる。これら尊格たちの清らかさは以下の通り。(1) (2) ヘールカとヴァーラーヒーの八面十六臂は八解脱と十六空であり、また彼らはそれぞれ八十種好と三十二相を表す。(3) ~ (6)、(7) ~ (10)、(11) ~ (14)、(15) ~ (18)、(19) ~ (22) の尊格はそれぞれ四無礙解、四依、四法印、四無畏、五根のうちの四根である。この曼荼羅の実践の効果は、利益を得ることと単に説かれている。

『アビダーノータラ』第 59 章は、ヴァーラーヒーのフリダヤマントラすなわち 13 文字のマントラの曼荼羅を説く。八花弁蓮華の中央に (1) Vārāhī 別名, alias Vajravārāhī (hā 字) がいる。その外の四方に位置する 4 つの門に (2) Praṇavā (om 字)、(3) Vaḍavā (va 字)、(4) Jraginī (jra 字)、(5) Vairinī (vai 字) がいる。蓮華の八花弁のうち、四維の方位を向く花弁に (6) Roṣaṇī (ro 字)、(7) Capalā (ca 字)、(8) Nīhārī (nī 字)、(9) Yemalā (ye 字) が、四方を向く花弁に (10) Hūmkārī (hūṃ 字)、(11) Hutāsānī (hūṃ 字)、(12) Phaṭnī (phaṭ 字)、(13) Svākārī (svā 字) がいる。彼女たち全員が、自分に似たそれぞれの夫 (名称不明) とともにいる。これら尊格たちの清らかさが何であるかは説明されない。この曼荼羅の実践の効果は、全ての願いが叶うことである。

以上の 4 種類のマントラの他に、サンヴァラの諸文献にはヘールカの根本マントラ (mūlamantra) が広く説かれる。梵語写本が現存する文献のうち、『アビダーノータラ』第 57、58 章は、このマントラ全体を構成する文字を 1 つ 1 つ明確に示すこと (抽出 uddhāraṇa) を主題とする最古の文献である。同章にはシヴァ教の聖典『タントラサドバーヴァ』との類似偈も見られる。これら『アビダーノータラ』第 57、58 章により、ヘールカの根本マントラを 1 文字 1 文字正確に知ることができる。こうして明らかになったヘールカの根本マントラは以下の通りである。標準的なサンスクリット語の綴りになっていないものについては、括弧の中に標準的な綴りを記した。——om namo bhagavate vīreśāya mahākālpāgnisamṇibhāya jaṭamakūṭkaṭāya damṣṭrākārālograbhīṣaṇamukhāya sahasrabhujabhāsurāya paraśupāśodyataśūlakhatvāṃgadhāriṇe vyāghrājīnāmbardharāya mahādūmṛāndhakāravapuṣāya kara kara kuru kuru *vandha vandha (= bandha bandha) trāsaya trāsaya kṣobhaya kṣobhaya hrauṃ hrauṃ hrah hrah phem phem phaṭ phaṭ daha daha paca paca bhakṣa bhakṣa *basa (= vasā)rudhirāntramālā*balamvine (= -valambine) *griṇṇa griṇṇa (= grṇṇa grṇṇa) saptapātālagatabhujamgasarpam *bā (= vā) tarjaya tarjaya *ākadhākaḍha (= ākaḍhākaḍha) hrīṃ hrīṃ *jṇaṃ jṇaṃ (= jṇaṃ jṇaṃ) kṣmām kṣmām hām hām hīm hīm hūṃ hūṃ kili kili sili sili hili hili dhili dhili hūṃ hūṃ phaṭ (訳「オーン、①勇者たちの主であり、②偉大な劫火のようであり、③毛髪を上豊かに結び上げており、④牙のある開いた凶暴で恐ろしい口をもち、⑤1000 本の腕をもって輝いており、⑥斧と索繩を掲げ槍とカトヴァーンガ杖を持ち、⑦虎の皮の衣をまとい、⑧大いに暗い暗闇のように素晴らしく美しい世尊に敬礼します。なせ、なせ。せよ、せよ。縛れ、縛れ。怖がらせよ、怖がらせよ。震わせよ、震わせよ。フラウン、フラウン。フラハ、フラハ。ペーン、ペーン。パト、パト。燃やせ、燃やせ。焼け、焼け。食べよ、食べよ。脂肪と血の [付

いた]腸の輪をぶら下げのお方のために、つかめ、つかめ。七冥界にいる蛇あるいはナーガを怯えさせよ、怯えさせよ。引き寄せよ、引き寄せよ。フリーン、フリーン。ジュニャウン、ジュニャウン。クシュマーン、クシュマーン。ハーン、ハーン。ヒーン、ヒーン。フーン、フーン。キリ、キリ。シリ、シリ。ヒリ、ヒリ。ディリ、ディリ。フーン、フーン、パト)。なお、この根本マントラ中の語 *ākāḍḍha* は梵語ではなくプラークリット(俗語)であり、パーリ語と同じく「引き寄せよ」(命令形)という意味である。

根本マントラの(訳中に付した)①から⑧の部分は「八句のマントラ」(*aṣṭapadamāntra*)とも呼ばれる。それ以降、つまり「なせ、なせ」以下は、ヘールカを中心とする曼荼羅緒を構成する24人の勇者(*vīra*、男性尊格)を表す。ヘールカの根本マントラの1文字1文字を尊格に変化させる観想は説かれていないが、このように根本マントラもまた曼荼羅——この場合はヘールカと24人の勇者たちから成る曼荼羅——を表すとされている。

ヘールカと24人の勇者たちを含む曼荼羅は、実はサンヴァラの伝統においては最も一般的な曼荼羅である。この曼荼羅はサンヴァラの多くの文献に説かれているが、本研究が基礎研究の対象とした『アビダーノッタラ』第14章も同様である。同章はこの曼荼羅を生起する観想と、身体内の火と甘露を観想する心身相関的のヨーガを主な内容とする。前者の箇所はとりわけルーイーパ(*Lūyīpa*)作『チャクラサンヴァラの現観』(*Cakrasaṃvarābhisamaya*)と、後者の箇所は同じく『チャクラサンヴァラの現観』とクリシュナ(*Kṛṣṇa*)作『四次第』(*Olicatuṣṭata*)との関係が深い。内容の発展具合から、『アビダーノッタラ』第14章の編纂は、『チャクラサンヴァラの現観』以降、『四次第』以前である。

研究代表者作成の『アビダーノッタラ』第14章の校訂テキストと英語訳注はまだ刊行されていないので、心身相関的のヨーガを説く箇所(14.134-140)の全日本語訳をここに提供しておく——「全ての勇者と瑜伽女たちは、大楽に入る踊りを行って、世尊の身口意となって住する。母音と子音を等しくなしてから、そこに線(火)を結びつけるべきである。線(火)は上に燃え上がっている。作為者は下に流れる。精液の姿となって流れる。甘露の滴の姿をもつものを[観想すべきである]。攪拌対象と攪拌主体の瑜伽により、智慧の光線が、ここにおいて業の風により点火し、臍の曼荼羅において煙を発し、あまたの光とともに燃え上がる。三昧耶輪(心臓の法輪)のかの善逝たちを燃やし、如来たちの報輪にある方便(*om*字)を3回右回りに巡って、眉間の白毫にあるマルモードガータナ門を通過して出て、十方世間界にいる如来たちの智慧の甘露をつかみ、[自分の]頭頂の穴にありジャーランダラと呼ばれるカナカ門を通過して入り、最上なる歯の境目にある穴を通過して報輪に安らぎ、燃やされた如来たちの歓喜を生じ、臍の曼荼羅(応輪)で堅固となる。これに関しても、出ることも入ることも、見えない。毛の先端の10万分の1[の大きさ]だからである。無上[の大印]に楽のままに住することができる。自分の守護尊との瑜伽により、同じ[この次第]一切を観想すべきである。彼は、思考され得ないものであっても、思考(観想)すべきである。そして心は決して表示されない。彼は思考され得ないものであっても思考すべきである。それにより、保持(大印の成就)を得るだろう。」類似の観想は14~15世紀に活躍のヴァナラトラ(*Vanaratna*)の『秘密を明るみにするもの』(*Rahasyadīpikā*)にも見いだせる。上に翻訳した観想を極簡潔にまとめると、以下のようなになる。実践者は瞑想の中で自分の身体内の臍のあたりに火を生じる。その火は身体内を上昇し眉間を取って身体外に出る。そして十峰の如来たちの身体内を流れる智慧の甘露を取り、その如来たちの智慧の甘露が頭頂から自分の身体内に入り、滴り、臍のあたりに安らぐ。そこへの集中を深めていくと大印という最高の境地を体験する。

『アビダーノッタラ』第50章の主題は、古代バラモン教以来ヒンドゥーの諸伝統で重視されるガーヤトリー(*Gāyatrī*)のマントラに関する諸実践——その念誦、ガーヤトリー女神の観想、サンディヤー[時間の節目](*saṃdhyā*)に行う儀礼——をサンヴァラ系密教の観想として再構築することである。古代バラモン教のガーヤトリー・マントラの文言をアレンジしたヘールカのガーヤトリー——*om śrīherukāya vidmahe vidyārājāya dhīmahe tan no dhiyaḥ pracodayāt āh hūm*(訳「オーン、吉祥なるヘールカのために、私たちは知る。明呪王のために、私たちは瞑想する。それゆえ、私たちの瞑想を彼女は促してくれますように。)」——が説かれる。またガーヤトリー・マントラ(太陽神のマントラである)を神格化したガーヤトリー女神は、ここではヘールカの妻であるヴァーラーヒーであり、かつ心身相関的のヨーガの瞑想の中で実践者が自分の身体内の臍のあたりに生じる火(太陽とのパラレル)である。瞑想によってこの火が身体内の4つのチャクラを通過しながら上昇していくが、その通過がサンディヤー(時間の節目)である。ここでのサンディヤー儀礼は、供物など外的な物を必要としない、心身相関的な内的実践(観想)である。だが、ヒンドゥー世界においてガーヤトリー・マントラやサンディヤー儀礼が広く実践されてきたのに対し、この内的なガーヤトリーの実践が仏教内でのどの程度行われたのかは不明である。

以上、本研究を通して、『アビダーノッタラ』を中心にマントラ論と心身相関論がどのような展開をしていったか、またその展開に関連する文献の編纂時期の前後関係について、一定程度が明らかになったと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 110
2. 論文標題 Buddhist Mantras in the Form of Mandala Deities: A Critical Edition and a Translation of the Sanskrit Text of the Abhidhanottaratantra, Chapters 37, 51, 52, and 59	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学高等研究所紀要	6. 最初と最後の頁 31-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 68
2. 論文標題 The Earthly Four Jewels in the Form of Mandala Deities: A Critical Edition and a Translation of Kambala's Sadhananidhi, Chapter 8	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 智山学報	6. 最初と最後の頁 1-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 10
2. 論文標題 Rethinking the Buddhist Discourse on Holy Sites in the .Daakaar.nava: A Critical Edition and a Translation of the Sanskrit Dakarnava Chapter 50-3	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 早稲田大学高等研究所紀要（WIAS Research Bulletin）	6. 最初と最後の頁 39-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 67
2. 論文標題 The Sadhana of the "Adamantine Body" Mandala: A Critical Edition and a Translation of the Sanskrit Dakarnava Chapter 50-8	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 智山学報（Journal of Chisan Studies）	6. 最初と最後の頁 45-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 12
2. 論文標題 Selecting Letters to Make the Fundamental Mantra of Heruka: A Critical Edition and Translation of the Sanskrit Abhidhanottaratantra, Chapters 57 and 58	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学高等研究所紀要	6. 最初と最後の頁 33-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 11 (2) 66
2. 論文標題 Compassion, Self-Sacrifice, and Karma in Warfare: Buddhist Discourse on Warfare as an Ethical and Soteriological Instruction for Warriors	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Religions	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.3390/rel11020066	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Sugiki, Tsunehiko	4. 巻 78 (3)
2. 論文標題 An Aspect of Indian Buddhist Views of Capital Punishment and Severe Physical Punishment	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Sugiki, Tsunehiko
2. 発表標題 The Structure and Meanings of the Heruka Mandala in the Buddhist Dakarnava Scriptural Tradition
3. 学会等名 World Sanskrit Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉木恒彦
2. 発表標題 多次元化するマントラ 『サーダナニディ』と『アピダーノータラ』を中心に
3. 学会等名 智山勸学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 杉木恒彦
2. 発表標題 24人の勇者たちの24の教え
3. 学会等名 第61回智山教学大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 杉木恒彦
2. 発表標題 ダーカールナヴァの聖地論を再考する
3. 学会等名 第28回西日本インド学仏教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sugiki, Tsunehiko
2. 発表標題 Roundtable: Southeast Asia Inter-religious Dialogue
3. 学会等名 The 4th Asia Future Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sugiki, Tsunehiko
2. 発表標題 Rethinking the Buddhist Discourses on Politics and Physical Violence
3. 学会等名 Peaceful Development of South Asia (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 杉木恒彦・高井啓介 (共編著)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 LITHON	5. 総ページ数 322
3. 書名 霊と交流する人びと 媒介者の宗教史 (上)	

1. 著者名 杉木恒彦・高井啓介 (共編著)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 LITHON	5. 総ページ数 376
3. 書名 霊と交流する人びと 媒介者の宗教史 (下)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----